

仲	小	吉	河	青	松	山	並	原	山	昌	持	山	田	加	櫻	江
田	村	直	原	山	尾	崎	河	本	田	子	田	口	中	藤	井	角
友	庄	伊	良	善	清	定	太	由	金	亮	邦	俊	源	佳	三	興
一	五	次	次	一	三	道	助	巳	右	一	藏	治	一	吉	郎	義
賀	同	同	平	惠	屋	石	同	安	出	庄	同	松	秋	阿	出	
野	同	同	田	曇	三	見	同	來	雲	原	同	江	鹿	井	東	
一	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	五	五
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
藤	本	岡	貴	草	卜	武	兒	木	飯	植	勝	今	錦	高	佐	高
間	田	虎	谷	光	部	永	玉	幡	塚	田	部	岡	織	見	藤	見
精	常	次	精	義	亮	貞	直	久	謙	元	本	正	義	辨	直	顯
同	吉	郎	助	質	一	一	市	右	道	確	右	一	教	三	保	之
同	大	同	同	松	出	同	出	工	東	同	同	同	出	灘	灘	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	板	石	松	山	福	久	山	原	福	西	飯	生	木	山	上	保
同	倉	橋	本	本	田	家	本	田	田	尾	國	田	佐	田	村	科
同	隆	正	萬	哲	稻	歡	正	吉	吉	常	重	鹿	德	美	彌	陽
同	治	彦	一	郎	夫	一	次	四	四	彦	之	之	之	治	太	治
同	同	平	境	灘	美	同	灘	美	灘	米	同	大	大	出	松	出
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

遠	持	勝	江	三	安	高	原	福	勝	西	小	飯	陰	三	江	飯
藤	田	部	角	代	食	田	岩	間	部	尾	林	塚	山	代	角	塚
薰	晉	貫	重	耕	義	令	之	秀	夫	善	德	良	吉	芳	泰	十
一	同	出	久	同	同	久	檜	灘	久	平	東	平	直	同	久	同
久	同	東	木	同	同	木	山	分	木	田	京	田	江	同	木	同
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
木	和	昌	藤	香	永	原	錦	小	高	足	古	曾	大	大	古	持
佐	田	子	永	川	松	要	織	村	島	立	川	田	谷	森	川	田
吉	守	正	敏	敏	恭	助	竹	喜	敬	源	賢	米	義	正	信	高
助	重	次	勉	德	藏	同	香	藏	三	次	郎	郎	工	治	藏	市
平	庄	庄	松	大	同	同	同	庄	同	同	同	同	同	同	同	出
田	原	原	江	野	同	同	原	同	同	同	同	同	同	同	同	東
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
新	神	三	保	陰	樋	常	保	多	多	河	内	津	伊	黑	保	金
田	門	加	科	山	野	松	科	々	々	瀬	藤	田	藤	田	科	森
全	銀	茂	以	吉	良	因	德	納	納	卓	瀧	義	享	文	惠	健
野	同	恒	智	久	弘	信	信	久	成	二	郎	應	市	之	藏	治
伊	同	同	同	同	同	同	同	同	出	平	同	同	野	庄	出	直
波	同	同	同	同	同	同	同	同	西	田	同	同	波	原	西	江
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

持田俊久	常松信之助	水政恒	平野房助	高橋深淵	長廻熊市	高橋鐵之丞	小村清藏	木佐長造	中島幾三郎	大谷彌吉	世良朋治	錦織足喜代	晴木親久	後藤猶逸	山根一郎	片寄善之助
平田美久	久多國富	平田	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
石倉俊寛	秋上武雄	佐草吉雄	錦田利清	廣江信夫	渡邊東夫	若木久兵衛	森山久市	今井龜一郎	玉木清四郎	黒崎直市	高砂美代重	樋野佐七	三宅種造	細木孫三郎	和田守吉	三代泰三郎
松江	同	大庭	出西	大庭	熊野	同	同	同	同	同	國富	出西	出東	國富	庄原	久木
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
池淵庫之助	多根一義	竹原熊重	高橋一雄	小村進一郎	吉岡徳若	中村豊秋	森脇甚右工門	石橋義賢	石橋定之助	山口俊武	松本美行	福島邦光	福島松次郎	吉岡清衛	中谷昌左	井原修三
出雲	宍道	出雲	同	同	庄原	同	同	同	同	同	同	同	松江	大庭	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

尾原佐七	飯國壯三郎	宅和三郎	錦織享	石橋平吉	日野邦茂	高橋昌造	奥井正吉	飯島菊次郎	淺尾龜吉	石田善市	加納廣淳	山根健二郎	加藤文太郎	石田太助	内藤龜三郎	小林仁哉
松江	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
大島新四郎	野津正雄	恒松於菟二	田代善之助	山口善之助	山内佐助	酒井林右工門	島谷理右工門	荒木文之助	古津孝一	野崎英補	石渡太吉	山田惣兵衛	山内信次郎	福間嘉助	神田新市	高見兵助
同	松江	太田	同	同	同	同	同	同	松江	東京	横濱	同	同	同	同	同
一〇	一〇	三〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇	二〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
勝部喜三郎	大澤良一	望月眞助	藤原勝義	馬場徹輔	加納傳右工門	原田治三郎	泉得一郎	石飛由三郎	中村眞一郎	竹内小三郎	三島彌藏	森脇儀兵衛	中田敏哉	今井兼文	内藤藤隆	米田金五郎
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

山尾鶴吉	村松熊三郎	大澤俊郎	田中西融	中西勇吉	泉得吉市	佐次芳三	津田善昇	森本太郎	原田吉三	金織謙三	三島豐市	山本秀俊	永江誠一	山本歡次郎	安來利雄	豊島成宣
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	松江
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
森山勇助	伊藤清四郎	日野松太郎	田中末正	井上重次郎	金津朗吉	石原省三	泉野熊之助	引野熊之助	福田金一	鳥谷喜一郎	金川得一助	伊藤甚之助	伊藤駒夫	森井平太郎	茂築儀三郎	長田四郎太郎
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
立脇良之助	安來真事	大町真事	三島大之助	北忠太郎	佐々木級之丞	高梨嘉一郎	柏井歡一郎	永井太郎	服部敬之助	濱村平三郎	門脇繁藏	田部象一	島田修吉	須藤啓義	福原二郎	原田近
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	松江	井尻	同	同	松江	宍道	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

湯澤重敬	梶谷精一郎	江田喜太郎	小川健	伊原虎太郎	古井善之助	吉岡利三郎	岩橋清次郎	佐々木義三郎	山下幸一郎	筆谷清三郎	松浦豊三郎	生和敬吉	中島幸雄	林常次郎	瀬崎瀧藏	前田宇三郎
同	同	出雲	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	松江	東京	同	松江
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
新宮保重	青山庸	津田善孝	勝部伊佐水	持田恒則	新宮龜吉	米江大輔	長崎榮平	舟木幸三郎	鎌田武	永島運	飯田稻一	安田一郎	兒玉膺	荻野操	吾郷一	渡邊貞吉
玉湯	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	松江	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
友廣善藏	落海龜藏	菊田多利男	錦織敏治郎	瀧川辰郎	中谷秀	和田守良	内藤金之助	柿田武重	西山虎治	福井益光	藏光長次郎	加藤藤巖	溝口光忠	桐谷圓藏	田中竹次郎	小玉愛
同	松江	安來	庄原	同	同	東京	同	同	同	同	同	同	同	同	同	松江
一〇	一〇	五〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

爲石政市	木村壽久	田中惠三郎	依國直道	鹽野直道	平野愛造	横山登志丸	千石興太郎	門脇季光	速藤博一	朝原梅一	高木虎三	萩原憲三	青山與市	川谷熊市	竹田秀作	青山久次郎
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇					一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
佐川春水	松尾百一	相見繁一	近藤英明	並河亮枝	竹吉正二	岡精二	服部之總	秦常造	月森俊寛	勝部忠次郎	永田基一	七井武一郎	小村千太郎	松尾忠左衛門	僊石政太郎	尼子靜
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇	一〇	一〇	三〇	一〇	一〇	一〇	一〇
中村稻造	田原和男	香西龍雄	木村小左衛門	佐藤信介	宮田慶藏	太田清行	加藤源一	木幡理吉	木幡貫川	廣瀬貫喜	遠藤佐々	錦織忠正	今田見信	三島定之助	羽二生啓之助	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	二〇	二〇	二〇				二〇	一〇	一〇	

森野廣亮	安津貞保	川上拾次郎	樋野義一	野津保一	白川繼紹	野津象二郎	今石二三雄	金津榮一	宮本熊三郎	野津忠芳	井上傳助	池田鶴之助	松岡季芳	奥田秀穂	高橋軍四郎	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	
友田惣太郎	森井喜一	福間金之助	小西喜八郎	井山潔	長谷川孝三郎	小林覺三郎	長谷川正司	戸谷正一	寺本乾造	仲田貞次郎	松浦英一	岩田寛之助	長谷川國太郎	遠藤貴愛	野津幸登	野津本吉郎
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
梅村隆保	宮永密	川上惣太郎	安達喜三郎	中村富之助	青山與助	片寄恭藏	大瀧源九郎	糸川權一	佐藤學禪	安井大學	尾野敏郎	藤原琴川	野々村治一	難波保一	加田友太郎	島根縣教育會
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

比婆之山神陵の考察

高橋知男	山本太右衛門	川上長吉	青山茂十	遠藤庸二	池淵祥次	伊原平之助	細田吉藏	高橋圓三	渡利千船	野口敏夫	庵原常一	菊池真壽水	渡利彌生	横山条一郎	永井清志	三成善次郎
同右	惠曇	佐太	惠曇	同	同	同	同	同	同	同	東京	秩父	同	同	同	同
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	三〇	一〇	一〇	三〇	三〇	二〇	二〇	一〇	二〇	一〇	一〇	一〇
大輝秀穂	後藤彌太郎	西郡龜一	赤名彌一郎	長瀬長之助	眞先啓太郎	久富二六	小竹福市	山本禎市	山本市五郎	伊藤隆一	中村孝一	井上惠三郎	安達善太郎	井上彦三郎	安達岩次郎	來間俊治
東京	廣瀬	井尻	赤屋	安田	廣瀬	市八幡	同右	同右	惠曇	同右	佐太	同右	同右	同右	惠曇	佐太
二〇				一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	三〇	一〇	一〇
家塚勝久	佐々木代修	木上武吉	井根八春	山本邦之助	山崎精一	安田竹野	野々村運市	土谷弘毅	井川馨彦	園山雅英	石原勘一郎	野津勝治	來間恭同			
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
																二〇

會友氏名

片岡義成	石橋清次郎	山尾小春	藤脇進	藤原傳三郎	角南金平	石塚尊俊	原運一	後藤高宣	樋野直雄	伊藤金次郎	清水隆道	安部正法	奥名俊夫	川上清政
東京	平田	直江	同右	同右	同右	同右	久多美	同右	松江	同右	同右	同右	同右	同右
玉木薫藏	森脇佐平	井上爲若	有藤慶之助	川谷謙一	兼本重一	須藤利周	都谷枝萬次郎	松浦芳造	金築邦久	永原與一郎	永井秀松	安達勇	野津文一	長谷川太重
東京	松江	揖屋	出雲	同右	同右	同右	松江	同右	國富	同右	同右	佐太	同右	玉湯
並河秀夫	青戸巖	播垣正朋	古満友次郎	山本喜三郎	森廣博久	江田守衛	和田順次郎	坪川三郎	小西嘉三郎	大谷小一郎	小笹本市	前田保	隅岡良造	小島清兵衛
安來	松江	松江	松江	同右	出雲	同右	松江	同右	同右	同右	同右	同右	同右	松江
神原元義	須山要次郎	谷本清興	米田喜平治	山田清文	福原次右衛門	西谷龜之助	園山清次郎	岡闕逸	三島和一郎	森木元四郎	古莊末男	奥名四郎三郎	加納虎之助	長谷隆
木次	出東	松江	松江	同右	出雲	松江	同右	久木	松江	同右	同右	同右	同右	佐太

會友氏名

山本源一郎 松江	福井徳次郎 同	小林壽之助 同	妹尾信敏 同
林元一郎 同	長谷隆 佐太	小村泰造 平田	荒井嘉四郎 松江
佐崎孝道 東京	宮川秀理 講武	竹内繁藏 大社	白築祐久 掛合
渡邊年男 安來	竹田武次 井尻	横川利一郎 赤屋	並河榮四郎 廣瀬
内田忠三郎 同右	内田清昭 井尻	勝部宇太郎 東京	山根恭一 東京
加藤勝藏 東京			

會計報告書

自昭和十五年十月一日
至昭和十八年六月卅日

收入

内譯 贊助會費

假入 金

支出

内譯 印刷及通信費

- 大國主神 一千部、趣意書 一千枚、神代矛盾 一千枚、封筒 一千枚、大型封筒 一千枚
- 往復葉書 二千枚、葉書 三千枚、會報 一千部、會報發送費其他
- 集會費並ニ事務費
- 調査研究費（人件費ヲ含む）
- 會員募集費及雜費

一三、八一〇、〇〇

九、八一〇、〇〇

四、〇〇〇、〇〇

一三、七五〇、〇〇

五、五〇〇、〇〇

二〇〇、〇〇

七、五〇〇、〇〇

五五〇、〇〇

編輯後記

本稿は、最初出雲に於ける製鐵の起原とその遺跡とを中心にして、この地方に高天原の皇居が存在したと、三種の神寶が悉く出雲から出現したことの一切を説明する積りで、殆ど六百頁に及ぶ原稿を作製したけれども、種々の都合で今回は第一回報告書としてこれだけを印刷し、次回に於ては、高天原の遺跡を圍る上代の遺跡と神社とに關する現地報告を主體とした發表を行ふことにした。この間に於て、現地の人々から非常な御好意を寄せられ、御蔭で幾分確信を以て自説を述べる事が出来得るやうになつたのにも拘はらず、前記の如き次第で御期待に反する結果となつたことは甚だ遺憾に存する次第である。殊に井尻村の門脇繁藏君は、多年に亙り寢食を忘れて神域の調査、顯揚に努力し、本稿の素地と成るべき幾多の貴重な資料を提供したり、滿二年間各地を同道して案内して下さつたので、遺跡や参考地を悉く發表して同君の勞に報いたいと思つて居たのにも拘はらず、印刷の都合で現地報告的な部分を次回で無いと發表出来なくなつたことは寔に残念であるけれども、其の間に於て更に調査の完璧を期することも出来るので、取敢ず比婆之山の参考地の概要を記すのに止めて置いた。

猶ほ此の調査報告書の刊行が遅延したために、地元の警察の取調を受けたりなどして、關係者各位に非常な御迷惑を御掛けしたことを深く御詫する次第である。（昭和一八、六、三〇）

註一、四頁五行目

大日本地名辭書に、西伯郡野村高姫は、三代實錄元慶七年授位の當國天照高日女神社の所在地にして、同郡手間村は、天乃神（手萬の謬）社の所在地歟とあれども微證なし（和名抄、前者星川郷、後者鳴部郷）

註二、二五頁一行目

永徳二年の古文書といふのも覺束ないものであつて、恐らく明治初年に當地方に居た某の手に成る偽文書であらう。偽文書なるが故に其の片言隻語を掲げるととめてゐるものと思はれ、今日ではもはや臆面もなく人の目にふれせしめ得ざるものに相違ない。けだし神納山は勘納にある山の意で、勘納とは永正二年六月六日の秋上經重が平濱八幡の寶光寺に寄進した田地二反の寄進狀にも岩坂勘納谷元内地之事、又同五年三月三日の同寺領目錄にも同じように見えて居て、古く勘納の文字を用ゐたことが明かである。然るにこの勘納は古く勸農とも記したものがあ

註三、四一頁十七行

和名抄には、伊豫國越智郡にも高市^{多希}郷がある

註四、四三頁四行目

神名帳、大和國葛下郡に、葛木二上神社^大、が金村神社、火幡神社、伊射奈岐神社と共にあつて、瓊々杵尊が天降り給ふた日向の高千穂の二上峯と同様に、大和國が饒速日命の天降りました地であつて、高天原の故地に非ざることを示して居り、神武紀にも「厥飛降者謂是饒速日歟」とあるが如く、神武天皇は日向を御發足になるとき既に大和國に饒速日尊が天降つて居られることを御存知あらせられたのであつて、その御東征が「乘三天磐船飛降者」を征服

することを以て目的と爲されたことが明かである。

註五、五六頁十四行目

攝津國菟原郡に保久良神社、若狭國三方郡に闇見神社がある

註六、六一頁四行目

出雲神戶が、熊野、杵築を始めとして、國內百八十六所の神社の神戶であるとて、風土記の五百津鉏々猶取々而所造天下大穴持命、二所大神達依奉、とある場合の五百津鉏云々は所造天下大神の冠稱と解して、二所大神は熊野加武呂乃命と所造天下大神とを指したものであるから、二所大神達依奉とあるのは、この二所の大神を始めとして百八十六所の神達に神戶を依さし奉つたことを現はしたものであるとの解釋も行はれて居るが、風土記には、大神と記された神が、熊野、杵築、佐木、野城の四所の大神のみであるから、この記事を、熊野加武呂乃命、大穴持命及他の二所大神の四所大神に神戶を依さし奉つたと解することも出来るけれ共、この文では、大穴持命と二所大神等の間に及の文字が無いからこれを四所大神の意に解することに無理があるのみならず、神戶を依さし奉るといふ語も不穩當であるから、この場合には、熊野大神が、五百津鉏を大穴持命と他の二所の大神等に御依さしになつたと解し、五百津鉏の上の「與」字は、國平けの矛の如き物名を脱したものと見て、「出雲の神戶は、伊弉奈積の麻奈子に坐す熊野加武呂乃命が、〇〇と五百津の鉏とを猶取り取らせて、所造天下大穴持命と他の二所大神等とに依さし奉り給ふたので神戶と云ふ、他郡等の神戶も且之の如し」と訓むのが穩當であるが、その場合には、「與」字「が大穴持命與二所大神」の如く挿入されて居なければならぬから、國平けの矛の如き字句は矢張り加へないで、原文の儘

に五百津鉏を依さし奉りきと訓むことになるので、「與」字を大穴持命の下に移して、この神戶は、杵築、佐太、野城の三要處に坐す大神達に、五百津鉏を取り取らせて依さし給へる熊野大神の神戶が在るので出雲神戶と稱し、他郡の神戶も亦この大神の神戶であつて餘神の神戶とは異なるから「出雲也、説名如意字郡」とあつて、この神を出雲大神と稱し、その神宮を出雲大神宮と稱したものであるから、幡磨風土記に、大和の三山の争鬪を仲裁に御出でになつた出雲の阿菩大神の阿菩が揖保の轉音であつて、式同國揖保郡、揖保坐天照大神^{名神}に相當するから、出雲大神たる熊野大神が天照大神と同神に坐すことが窺はれるが、杵築の神戶のことは、新抄格勅符に「杵築神六十一戸、出雲、天平神護元年奉充」とあることに依つて、それまで神戶が無かつたことが明かである

註七、六一頁八行目

和名抄に、山城國紀伊^岐、筑前國早良郡毗伊^比の郷名がある

註八、八二頁四行目

上代の攻玉は、この附近に産する青石や赤白の瑪瑙を加工したもので、所謂出雲石と稱せらるゝ青石が他には絶對に産出しないのみならず、赤白の瑪瑙も、今日では蒸焼にして加工を容易ならしめてゐるが、上代に於ては、生石の儘で加工したので、穿孔の際に鋼鐵錐を使用しなければ貫通せしめることが出来ない程石質が硬いので、頸玉の製作と製鐵とは密接不離な關係を有し、内地と南鮮地方以外に發見例の無い勾玉が、兩地の砂鐵鋼に依つて加工せられたものであらうことを想像することが出来る

註九、一〇〇頁八行目

國造本記には「風速國造、輕島豐明朝、物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造」とあり、式には、伊豫國風早郡二座、國津比古命神社、櫛玉比賣命神社があり、櫛玉比賣命神社は、大和國廣瀨郡にも廣瀨神社と共にあつて、饒速日命の妃たる御炊屋姫を祀つたものであることは、この社が斑鳩に在ることに依つて明瞭であるから、伊豫の國津比古命神社の祭神は、それが風早國造の一族が、饒速日命を祖神として祀つて居たものと見ることが出来る。

註一〇、一〇〇頁九行目

河内志には「讚良郡河上喙峯、在田原村、今號石船山、饒速日命降臨之地、云々」とあるが、この地は、河中や山腹に巨岩が堆積してゐるので、斯様に號けたものであるけれども、これは磐船を以て文字通りに石製の船であると誤認したことに基くものであるから、何等確實な根據は無いのみならず、法王帝説の歌に「イカルガノ、トミノホノミヅ、イカナクニ、タゲテマシモノ、トミノホノミヅ、又、イカルガノ、トミノヲガハノ、タエバコソ、ワガオホキミノ、ミナワスラエメ」とあるが如く、斑鳩と登美とが同地であることは確實である。

註一一、一〇四頁一行目

神名帳頭註には「平群郡龍田、或記云、伊勢瀧祭神、廣瀨龍田神則同體異名水神也、故此二神名號天御柱是天逆矛守護縁也、廣瀨郡廣瀨、倉稻魂也、谷水神也、龍田風神也、此兩者風水陰陽二神也、並伊弉諾尊所生也」とあり、廣瀨社縁起には「竊以神代昔伊弉諾尊曰、我所生之國唯有朝霧而薰滿哉、則吹撥之息成神號級長戸邊尊、級長津彦尊、此風神龍田社也、又飢時生兒曰倉稻魂命此大忌廣瀨社也、又曰若宇加乃賣命伊勢外宮分身也」とあるが、神名帳には武藏國入間郡、廣瀨神社、物部大神社、出雲伊波比神社、伊豆國田方郡、廣瀨神社、倭文神社、玉作水神社、劔刀乎夜爾命神社、火牟須比命神社、金村五百君和氣命神社、引手力命神社、金村五百村咩命神社、劔刀石床別命神社が有る

978

73

比婆之山神陵の考察

非賣品

昭和十八年十一月十日印刷

昭和十八年十一月十五日發行

發行所

東京都赤坂区青山南町三丁目六番地

神代出雲調査會

發行者

土屋長一郎

印刷所

東京都麹町区丸の内二丁目仲八号館

株式会社有恒社

印刷人

石上正三

終